

愛知の技術・家庭科教育

(第 52 集)

目次

I	はじめに	2
II	技術・家庭科教育における教育課程編成の重点	2
1	技術教育	2
(1)	技術教育における教育課程編成の重点	2
(2)	基本的な考えを受けた技術教育の授業実践	2
(3)	実践のまとめ	4
2	家庭科教育	5
(1)	家庭科教育における教育課程編成の重点	5
(2)	基本的な考えを受けた家庭科教育の授業実践	5
(3)	実践のまとめ	10
III	第 74 次教育研究愛知県大会の動向と今後の課題	11
1	技術教育	11
(1)	本年度の動向	11
(2)	レポート及び討論の内容と指導・助言	11
2	家庭科教育	12
(1)	本年度の動向	12
(2)	レポート及び討論の内容と指導・助言	12
(3)	家庭科教育としての「ゆたかな学び」を考える（総括討論）	12
IV	終わりに	13

愛知教職員組合連合会 教育課程研究委員会 技術・家庭科部会

2024 年度 教育課程研究委員

ブロック推薦 ◎部長 ○副部長

	名古屋			尾 張			三 河		
	名前	単組	分会	氏名	単組	分会	名前	単組	分会
技 術	山田 将大	名古屋	豊正中	榎本 佳祐	稲沢	平和中	石原 嵩之	豊田	高橋中
	井戸 康智	名古屋	港南中	伊藤 彰浩	知教連	名和中	後藤 靖智	新城	新城中
家 庭	山内 康子	名古屋	筒井小	野村富美子	海部	宝小	○武藤良子	岡崎	竜南中
	阿部 純子	名古屋	沢上中	鹿島 桃香	西春	清州中	鈴木彩子	豊橋	南稜中

第 71 次～第 73 次教育研究全国集会レポート提出者

	第 71 次			第 72 次			第 73 次		
	名前	単組	分会	名前	単組	分会	名前	単組	分会
技 術	◎黒柳優太	碧海	吉浜小	○所 良彦	一宮	萩原中	加藤仁視	名古屋	池の牧中
家 庭	○山田美保子	名古屋	天白中	◎大澤裕理奈	稲沢	稲沢北小	澤口 茜	名古屋	日比野中

第 74 次教育研究全国集会 レポート提出者 榎本 貴斗 (名古屋・当知中)

小原 絵里 (西 尾・東部中)

I はじめに

現代社会は、国際化・情報化、価値観の多様化など、数年先も予測できないほど、急激に変化し続けている。こうした社会を生き抜くためには、どんな問題と直面しても、置かれた状況をふまえ、学んだ知識と技能を応用した解決方法を探求したり、組み合わせて活用したりして、自分で判断し問題を解決する資質・能力を身につける必要がある。このような資質・能力の育成は、学習指導要領解説技術・家庭科の目標にも「生活の営みに係る見方・考え方や技術の見方・考え方を働かせ、生活や技術に関する実践的・体験的な活動を通して、よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築にむけて、生活を工夫し創造する資質・能力の育成をめざす。」と示されている。

II 技術・家庭科教育における教育課程編成の重点

1 技術教育

(1) 技術教育における教育課程編成の重点

これまでは「物事を正確に考える力」や「物事を正しく覚えられる力」、つまり計算力や記憶力が求められてきた。しかし、GIGAスクール構想によるタブレット端末の導入やテクノロジーの発展により、答えがある問いに対しては、深い思考を必要としない時代となってきた。知識を増やすことが重要ではなくなりつつあり、知識や技能をどのように組み合わせて活用するかやそれらを汎用的に活用する力などが重要になってきており、「わかる」から「できる」への変容を実現していかなければならない。そのためには、知識を学ぶだけでなく、学んだ知識を「使う場所」を作ることが欠かせない。そして、「わかる」から「できる」への変容を促すためには、「失敗」の経験も不可欠である。本実践では、「わかる」から「できる」への変容をめざすことで、子どもたちが学ぶ喜び・わかる楽しさを味わうことができるゆたかな学びの実現を意識した教育課程編成に重点をおくことにした。

(2) 基本的な考えを受けた技術教育の授業実践

技術の目標とめざす資質・能力との結び付きを意識した実践

① 技術の目標とめざす資質・能力

<技術の目標>

技術の見方・考え方を働かせ、生活や技術に関する実践的・体験的な活動を通して、よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築にむけて、生活を工夫し創造する資質・能力を次の通り育成することをめざす。

ア 生活と技術についての基礎的な理解（知識の習得だけでなく、さまざまな場面で活用できる概念の理解）をはかるとともに、それらに係わる技能を身につけるようにする。

イ 生活や社会の中から問題を見いだして課題を設定し、解決策を構想し、実践を評価・改善し、表現するなど、課題を解決する力（学んだことを実際の生活の中で生かすことができる力、どのような問題に直面しても自分なりの判断をして解決することができる力）を養う。

ウ よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築にむけて、生活を工夫し創造しようとする実践的な態度（主体的に意思決定したり行動したりしようとする態度）を養う。

② めざす資質・能力の実現にむけて（生物育成の技術：ミニトマト栽培の実践）

一次実践

ア 基礎的な理解に係わる例

- ・ 作物の育成に必要な基本的な知識や技能を習得する。

イ 課題を解決する力に係わる例

- ・ 作物を育成する過程で直面するさまざまな問題について、解決方法を考え、実践する。
- ウ 生活を工夫し創造しようとする実践的な態度に係わる例
 - ・ 一次実践の過程や問題解決の結果を評価し、改善及び修正する方法を考え、気づきや学びを二次実践に生かす。

二次実践

- ア 基礎的な理解に係わる例
 - ・ 一次実践で習得した知識・技能について、より詳しく、より効果的にするための技術について根拠をもって考え、習得する。
- イ 課題を解決する力に係わる例
 - ・ 一次実践で考えた解決方法や改善方法を実践し、よりよい方法を考えながら実践したり、新たに直面する問題解決にむけて、解決方法を考えたりしながら実践する。
- ウ 生活を工夫し創造しようとする実践的な態度に係わる例
 - ・ 実践を振り返り、作物の育成過程、問題解決の結果を評価し、改善及び修正する方法を考える。
 - ・ 習得した活用できる概念、生活の中で生かす力、自分なりの力で判断し解決する力をよりよい生活の実現のために生かす。

③ 実践の実際

ミニトマトを栽培し、市販されているミニトマトより甘いものを収穫することを目標に、種まきから収穫まで、どのような管理技術が、どのようなタイミングで必要かを調べながら探究的に実習を行わせた。一次実践では、教科書に記載されている基本的なミニトマトの種のまき方や手順、注意点、そして間引き等、収穫までに必要な管理について、確認しながら栽培を行った。その中で、必要な管理技術について知識として習得することはできても、実際に管理を実践することができなかつたり、収穫まではできたものの大きさが小さすぎるものや味、見た目が悪いものばかりになってしまったりする生徒が多くみられた。一次実践で失敗を経験することで、そこから得た課題を解決する方法や実践を振り返りながら改善及び修正する態度を生かす場として、二次実践に取り組ませた。

④ 一次実践

ミニトマトの栽培をはじめるにあたり、教科書に記載されている基本的な栽培技術について学習した。小学校の生活科できゅうりやなすなどを育成した経験があったことで比較的多くの生徒が収穫までの手順や管理方法について理解することができた。実際に栽培がすすむと、間引きや収穫のタイミング、与える水の量などに迷う生徒が多くみられた。また、収穫まではできたものの大きさが小さすぎるものや味、見た目が悪いものばかりになってしまう生徒もみられた。その原因を探究していく中で、生徒たちは、その日の気候にあった水の量やプランターを置く場所、土壌の栄養分など、栽培がうまくいかなかった原因について考える姿がみられた。得た知識だけでなく、実践の失敗から課題を見だし解決方法を考え、生かす場として二次実践で再度栽培を行った。

⑤ 二次実践

市販のミニトマトを試食し、甘さや大きさ、重さなどを分析した。一次実践で収穫したものと比較し、「より甘く、商品として扱えるミニトマトを作りたい」という生徒の声から課題を設定した。一次実践で学んだ基本的な管理技術を振り返り、土壌環境、肥料、かん水の量や時間など新たな視点について調べ、栽培を行った。土壌環境については、6種類の土（赤玉土、バーク堆肥、パーミキュライト、パーライト、腐葉土、

牛ふん)から必要な土を選び、最適な割合で配合した(図1、2)。生徒のワークシートには、「排水性をよくするためにバーミキュライトを多く配合した」「腐葉土を混ぜることで土壌が柔らかくなり、栄養分を土の中にためておく



図 1



図 2

力が増す」「有機質肥料として牛ふんを使う」など具体的な土壌の特長を理解し、実践しようとする姿がみられた。また、「気温の変化を少なくするためにハウスを作り育てたい(図3)」という生育環境に関する工夫をする生徒もいた。一次実践から改善及び修正し、課題にむけて工夫を凝らして栽培をすすめたことで、生徒たちは自分のミニトマトに愛着をもち、意欲的に活動を行う姿があった。



図 3

(3) 実践のまとめ

本実践では、技術の目標とめざす資質・能力の実現をめざした。一次実践で必要な知識を身につけるとともに、失敗を経験しながら、なぜ失敗したのか、どう改善及び修正するとよいかを二次実践にむけて考えながら取り組んだことで、二次実践では多くの視点を持ち、より実践的な技術の高まりを感じた。これらの姿から技術の目標とめざす資質・能力の高まりがみられた。



図 4

技術科の目標とめざす資質・能力の実現にむけた過程で、「わかる」から「できる」に変容できるように実践したことで、学ぶ喜び・わかる楽しさを味わうことができるゆたかな学びに近づけたと考える。

2 家庭科教育

(1) 家庭科教育における教育課程編成の重点

私たちの家庭生活をとりまく情勢は常に変化し続けている。多様な生活のあり方を認められるようになり、共生することが求められている中で、生活者である私たちの価値観が問われているのである。だからこそ、家庭科教育は単なる知識や技能の習得にとどまらず、子ども自身が生活における問題を見いだし、よりよい生活のあり方を多様な立場から検討できるような学びであるべきだと考える。

そのためには、子どもの思いや考えを中心に据えた、問題解決的な学びの展開が欠かせない。主体的かつ体験的な追究活動の中に、対話や問い直しの場を意図的に仕組んでいくことで、子どもが生活を多様な見方で捉え、価値観を広げられるようにしていく。そして、題材の終末には、自分自身の生活と社会のつながりにも視野を広げ、持続可能な社会のあり方を展望することのできる授業づくりを求めて研究をすすめた。

(2) 基本的な考えを受けた家庭科教育の授業実践

実践例 批判的思考力を育む授業開発

「成年まであと5年」～自立した大人をめざして消費者センスを身につけよう～

〈消費活動における生徒の実態〉

スマートフォンやタブレットの所有について尋ねたところ、71%の生徒が自分専用のものがあり、残りの29%の生徒も家族が所有する機器を扱う環境があると回答した。そして、88%の生徒が買い物をするときに参考にする情報は「インターネットやSNS」と回答した。このことから、多くの生徒が、デジタルの情報を日々見ていることがわかった。さらに、生徒の消費行動を知るために、12の質問項目に「Yes」「No」で答える形で、「消費行動チェック」を行った。「Yes」の回答率は以下のとおりである。(表1)「1:他人をすぐに信用する」57%、「2:新商品を見ると欲しくなる」55%、「3:頼まれたら断れない」51%、という結果から、多くの生徒が勧められる

表1 消費行動チェック(事前)

1:他人をすぐに信用する	(57%)
2:新商品を見ると欲しくなる	(55%)
3:頼まれたら断れない	(51%)
4:おまけがついている商品を見ると欲しくなる	(58%)
5:安いとつい買いすぎてしまう	(59%)
6:計画的に買い物をするのが苦手	(55%)
7:「おかしい」と思っても、店に言えないのでがまんする	(61%)
8:欲しいものがあればすぐに買ってしまおう	(34%)
9:中身よりもパッケージで選んでしまおう	(36%)
10:レシートはすぐに捨ててしまおう	(49%)
11:買い物のとき、商品の表示をよく見ない	(29%)
12:クレジットカードを使って買い物をしてみたい	(61%)

とあまり深く考えずに商品を買う傾向にあることがわかった。また、「4:おまけがついている商品を見ると欲しくなる」58%、「5:安いとつい買いすぎてしまう」59%、「6:計画的に買い物をするのが苦手」55%、という結果から、計画的に考えて商品を選択するよりも、安さやおまけにとびつき、「欲しい」という思いのまま購入する生徒が多いことがわかった。また、「12:クレジットカードを使って買い物をしてみたい」61%という結果から、クレジットカードの便利さを知っている生徒が多いことがわかった。保護者の多くがクレジットカードでキャッシュレス決済をしており、それを間近で見ていることが大きな理由と考える。そのため、成年となる5年後、自分のクレジットカードを持つ生徒が多いことが予想される。さらに「7:『おかしい』と思っても、店に言えないのでがまんする」61%という結果から、将来安易な契約により、自分に不利益なことが起きた際に、自己解決する術を今から身につけておかねばならないと考えた。

〈単元構想〉

本研究の単元を以下（表 2）のように構想した。（8 時間完了）

表 2

時間	学習課題	学習内容と教員の思い
1	・ 気になる広告を 発表しよう	単元の導入として、夏休みの課題にした「気になる広告」の発表を行う。広告は紙に限らず、デジタル媒体も含めることで、身のまわりにあふれる多くの消費情報に改めて気づかせたい。
2	・ 身のまわりの 消費生活に目 をむけよう	テレビCMを取り上げ、時間帯や番組によって流れるCMが違う理由を考える。そのことで、消費者と企業のニーズの関係に目をむけ、多くの情報が自分たちの消費生活を動かしていることに気づかせたい。
3	・ 消費生活の仕 組みを知ろう	支払い方法（前払い、即時払い、後払い）の違いによるさまざまな特徴、クレジットカードによる三者間契約、生活に必要な物資・サービスについての金銭の流れなどについて考える。
4	・ 物資を購入す るときのポイ ントを考えよ う	授業で使用する木工用接着剤を例にし、選ぶときの基準を考える。「値段」「品質」「量」「メーカー」など、それぞれの生徒が選んだ基準の項目をレーダーチャートにし、お互いに見比べることで、人それぞれの価値観が違う中で物資をどう選ぶかについて考える。
5	・ サービス（学習 塾）を選ぶと きのポイン トを考えよう	学習塾の広告を教材として取り上げ、そこに書いてある情報の曖昧さについて追及することで、批判的思考力を高める。選択に必要な情報をどう収集し、整理、分析すべきかについて考える。
6	・ 売買契約につ いて知ろう	消費者被害が消費者と事業者の間にある情報量の違いにより起こることを理解し、消費者と事業者が対等な立場で結んだ公正な売買契約の必要性を考える。
7	・ 消費者トラブ ルについて考 えよう	身近に起こりうる消費者トラブルについて考える。具体例を示した動画を見たり、体験談を聞いたりすることで、消費者トラブルを自分事として捉えるようにする。その上で、消費者支援の具体例として地域の消費生活センターなどの各種相談機関やクーリング・オフ制度があることを知る。
8	・ これからの消 費生活につ いて考えをま とめよう	単元のまとめとして、消費者の基本的な権利と責任、環境や社会に及ぼす影響、自立した消費者としての責任ある消費行動を考える。さらに、成年として消費生活を送る上で、最低限必要な知識をはかる指標として、「社会への扉」（消費者庁2017）に記載されるクイズ12問を用いて正しい回答を考える活動を行う。5年後には成年になることをふまえ、自分がどんな消費者になりたいか、という展望をもちながら学習を締めくくる。

〈授業の概要〉

【授業の目標】

ここでは、学習過程で批判的思考を重視した 5 / 8 時間目の授業について述べる。

授業の目標は、「消費者が欲しい情報と企業側の伝えたい情報が異なることに気づき、自分（消費者）が欲しい情報を得るためにどう行動すべきか考えることができる」とした。

【授業の目標批判的思考力を促す手だてと場面】

教材として愛知県内の近隣の市にあるA塾の夏期講習生募集の広告を利用した。その塾に通っている生徒がいないことを確認し、学習塾の名前を特定できる情報は隠して提示した。この広告を教材に選んだ理由は、学習塾が生徒にとって身近な商品（サービス）であるということと、サービスならではの曖昧な表現が多く（表3）、批判的思考を促すのに適していると判断したからである。授業の中で広告を提示し、生徒に一つ一つの謳い文句を読み取らせる時間を設ける。その後、気づきを出し合う中で、曖昧な表現に目をむけ、批判的思考力を高めたいと考えた。

【授業展開】

生徒は、前時（4／8時間）の最後に、「学習塾を選ぶ際に重視する情報や気にすること」の項目を各自で考え、レーダーチャートにした（図1）。生徒があげた主な項目は「授業料」「実績」「場所」「先生の質」「学習形態」「自習室などの整備」などであった。本時では、導入時に各自のレーダーチャートの項目を確認し、いくつかの項目を「値段」「実績」「環境（学習形態や施設、場所）」に分類して板書した。その後、「消費者の欲しい情報と企業が伝えたい情報を比べてみよう」と発問し、A塾の広告を配布した。

生徒たちから出た意見は、「自習室が使いたい放題と書いてあるからいいなと思った」「個別指導と集団指導と書いてあるから自分に合った方法が選べそう」「社会 46 点、理科 41 点もあがるのはすごい」「成績が上がりましたと書いてあるから、自分も上がりそう」など、肯定的なものが多かった。そんな中、生徒のBは、「下のほうに小さな文字で『テキスト代は別料金です』と書いてある。小学生の授業料は0円と書いてあるけれど、実質0円にはならない。本当はすごくお金がかかるかもしれない」と発言した。それをきっかけにして生徒たちは「確かに。これはわかりにくいな」と口々につぶやき、広告の曖昧な表現に意識をむけはじめた。

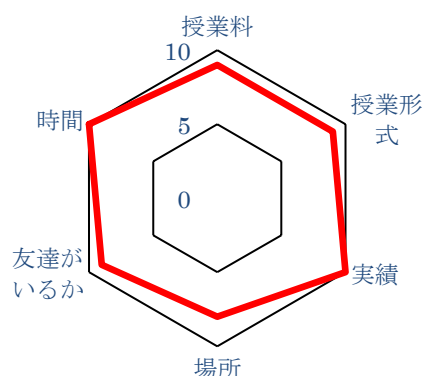
そこで、『曖昧な表現』や『わかりにくい表現』はないか、見方を変えてみよう」と発問した。生徒たちは、再度広告の文字を批判的な視点をもって読みはじめた。この後出た意見は、「うまくいったことばかり書いてある。失敗はないのか」「安い授業料には裏がありそう」「社会科が46点あがるなんて普通じゃありえない。中間テストで54点の人が期末テストで100点になることになる。そんなことは絶対にない」「2ランクアップと書いてあるけど、何が2ランクなのかわからない」「成績が下がった人のことが書いてない。全員あがるなんてありえない」などであった。

生徒のCは、前時に作成した自分のレーダーチャートと見比べて、「値段、実績、環境など、本当に知りたい情報はこの広告だけではわからない」と発言した。生徒たちが欲しい情報が広告からは読み取れないことに気づいたところで、広告の情報がなぜ曖昧に書かれているのか発問した。生徒たちは「多くの人が関心をもつことを書いて人を集めたいから」「企業はお金儲けをしたいからよいことしか書かない」という意見が出た。

表3 曖昧な表現（文言）の例

- ・2ランクアップ…ランクとは何か。
- ・46点アップ… 定期テストか小テストか。何点満点か。成績がアップした人の割合はいくらか。
- ・個別＋集団の合体…どんな学習形態か。
- ・テキスト代は別料金…別とはいくらなのか。
- ・小学生0円…本当に0円か。

塾選びで重視するポイント



（図1）生徒Cが生成したレーダーチャート

〈結果および考察〉

【授業における生徒の考えの変容】

A塾の広告を見た生徒たちは、はじめ、「成績があがる」などのプラスの情報ばかり目をむけていた。このことは、事前に行った「消費者行動チェック」(表1)で、「1:他人をすぐに信用する」が57%だった生徒の実態と一致した。情報を批判的に見る経験の乏しさから、書かれている情報を表面的に捉えてしまう姿が浮き彫りになった。しかし、「テキスト代は別料金」という小さな文字に関心を寄せた生徒のBの発言をきっかけに、生徒たちの思考の流れは、肯定的思考から一気に批判的思考に切り替わった。その後は、批判的見方をした意見がずっと出て、広告の情報の背後にある曖昧さが明確になった。このことは、教員の発問「見方を変えてみよう」が功を奏した結果と考える。さらに、批判的思考で読み

取ることにより、消費者が本当に知りたい情報と、企業が商品売るために提供する情報が一致しないことがあることに気づくことができた。このことは、多くの生徒が振り返りの際に、「情報を何でも信用するのではなく、本当かどうか確認してから買いたい」と書いたように、これからの消費生活で何に気をつけるべきか考える布石となった。

また、7/8時間の終わりに、学習前に行った「消費者行動チェック」(表1)を「これからなりたい自分」という視点で再度行った。(表4)その結果、下線のついている質問は数値に変化が見られた。その中でも特に「1:他人をすぐに信用する」が57%から28%に、「2:新商品を見ると欲しくなる」が55%から33%に、「5:安いとつい買いすぎてしまう」が59%から32%に、「9:中身よりもパッケージで選んでしまう」が36%から26%に変化した。これらのことから、批判的思考力を働かせたことが、商品を選択する方法の変化につながったと言える。

【単元終了時の振り返り内容及び分析】

生徒は、単元の最終時間である8/8時間に、単元全体の振り返りをまとめた。表5、6、7は生徒のF、G、Hの記述である。このように、多くの生徒が、自分の消費生活を見つめ直し、批判的思考力を働かせながら、これからの消費生活で気をつけるべきことを考えることができた。

その後「社会への扉」(消費者庁2017)に記載されるクイズ12問(三択形式)を用いて正しい回答を考える行動を行った。これは消費の学習を終えた中学校1年生の実態を調査し、1年後、2年後、卒業時にも同じ設問を問うことで、生徒の意識の変化を追うことが目的である。正解率は次項の表8のとおりであった。問

1、2、3までは、契約に関する設問である。問1の正解率が29%であったことから、契約が成立するタイミングが十分に理解できていない生徒が多いことがわかった。また、問2が31%、問3が52%だったことから、「解約」や「取り消し」については、まだまだ正しい知識を身につけていないことが分かった。契約年齢が18歳に引き下げられて

表4 消費行動チェック(事後)

1:他人をすぐに信用する	(28%)
2:新商品を見ると欲しくなる	(33%)
3:頼まれたら断れない	(35%)
4:おまけがついている商品を見ると欲しくなる	(32%)
5:安いとつい買いすぎてしまう	(32%)
6:計画的に買い物をするのが苦手	(50%)
7:「おかしい」と思っても、店に言えないのがまんする	(48%)
8:欲しいものがあればすぐに買ってしまおう	(23%)
9:中身よりもパッケージで選んでしまおう	(26%)
10:レシートはすぐに捨ててしまおう	(36%)
11:買い物のとき、商品の表示をよく見ない	(27%)
12:クレジットカードを使って買い物をしてみたい	(52%)

表5 (Fの記述)

私はこの単元の勉強をして、お金を使うときは、慎重にしようと改めて思いました。基本、勧誘してくる人は詐欺かもしれないということをしっかり頭に入れておいて、物を買うときは、よく考えて、親と相談してから買おうと思いました。また、消費者は立場が弱いから、責任は売り手側にあると思っていたけれど、消費者にも消費者としての責任があることがわかりました。

表6 (Gの記述)

私は、今まで欲しいと思ったり、安くなっていたりするとすぐに買ってしまい、お金を使いすぎていたけれど、授業で、本当に必要かどうか確かめたり、そのものの評価がよいか調べたりして買うことが大事だと知りました。これからは欲しいからすぐ買うのではなく、しっかり考えて買いたいと思いました。

いることを鑑み、契約に伴う責任の重さを継続して考えさせていく必要性が明確になった。

問4、5は、クーリング・オフに関する設問である。問4が66%、問5が72%という結果から、多くの生徒が授業を通してクーリング・オフの意味を理解しており、インターネットでの買い物対象外ということも理解できていることがわかった。今後消費の形態がインターネットに大きく移行していくことが予想されるが、インターネット取引は実在店舗での購入よりも何倍もトラブルが多いことをより理解し、便利さと引き換えにしたリスクに目をむける必要性がある。

問6、7は、クレジットカードによる三者間契約に関する設問である。問6が66%という結果から、多くの生徒がクレジットカードの仕組みを理解していることがわかった。しかし、問7の正解率は52%と不十分だった。選択肢は「36回分割払い」「リボルビング払い」「ボーナス1回払い」の三つだが、「リボルビング払い」の意味を理解していない生徒が多いことがわかった。このことから、クレジットカードによるキャッシュレス決済では、預金残高を超えた支払いができるリボルビング払いに特に注意を促すことが大切であることが明確になった。また、前述した表1、4の消費行動チェックの20番目の項目「クレジットカードを持ちたい」に対して「Yes」と答えた割合が授業前は61%だったのに対して、授業後は52%と減少した。授業前は保護者の多くがキャッシュレス決済をしている姿を身近で見ているため、便利そうや手軽そうだという理由で多くの生徒が持てみたいと回答した。しかし、授業を通してキャッシュレス決済のメリットデメリットを学習したことにより、まだ自分には早いと判断した生徒が多く見られた。しかし、半数以上の生徒はデメリットをふまえてでも、便利さを重視してクレジットカードを持ちたいと回答した。消費行動チェックの数値や生徒の思考、そして「社会の扉」の正解率の低さからも、生徒にとってクレジットカードは身近な存在ではあるが、危険と隣り合わせであることをふまえると、中学生の今の時期に

表7（Hの記述）

契約するときは、キャッシュレス化や通信販売の影響で、トラブルが起きやすくなっていることがわかりました。消費者として、ホームページの情報を確認したり、消費生活センターに相談したりしたいと思いました。また、通信販売や無店舗販売はクーリング・オフ制度が適用されないので、よく契約内容を確認してから買いたいと思いました。商品をよく選んだり、疑ってみたい、環境や弱者のことを考えたりするなど、8つの権利と5つの責任をよく理解して行動したいと思いました。

**表8 「社会への扉（消費者庁 2017）」
問題と正解率**

	「社会への扉」 設問	正解率
1	店で買い物をするとき、契約が成立するのはいつ？	29%
2	店で商品を買ったが、使う前に不要になった。解約できる？	31%
3	17歳の高校生が、保護者に内緒で10万円の化粧品セットを契約した。この契約は取り消せる？	52%
4	街で呼び止められ、展示会場に行ったら勧誘され、断れなくて10万円の絵画を契約してしまった。この契約をクーリング・オフすることはできる？	66%
5	ネットショップでTシャツを買ったけれど似合わない。クーリング・オフできる？	72%
6	買い物をした後日に代金を支払うことになるのはどれ？	66%
7	クレジットカードの支払い方法で、1つ1つの商品の残高がわかりにくいのは？	52%
8	自動車教習所へ通うため金融機関から20万円を年利（金利）17%で借りた。毎月5000円ずつ返済した場合の返済総額は？	22%
9	「必ずもうかる投資」ってあるの？	91%
10	製品による事故が発生したとき損害賠償を求めることができる？	82%
11	消費生活について相談したいときにかける電話番号は？	86%
12	消費者トラブルにあったとき、あなたならどうする？	89%

仕組みや使い方についてしっかり押さえておく必要がある。

問 8 は、キャッシング（借金）のリスクに関する設問である。選択肢は「約 23 万円」「約 26 万円」「約 29 万円」であったが、最も高額な「29 万円」という正解を選んだ生徒は 22% だった。このことから、ほとんどの生徒が「お金を借りる」ことのリスクの大きさが十分に理解できていないことがわかった。

問 9 は投資に関する設問である。中学校の学習内容では、投資について扱わないため、よくわからないまま回答した生徒が多いと思われるが、「必ずもうかる」という文言に対して批判的思考力を働かせ、91% の生徒が正解することができた。

問 10、11、12 は、消費者トラブルに関する設問である。製品の事故についての損害賠償については、82% の生徒が正解であった。商品の代金だけでなく、「広く損害賠償をすることができる」ことまで理解できている生徒が多いことがわかった。また、消費者トラブルにあったら「消費者センター」などに相談するという回答が 89% だったことから、ほとんどの生徒が、困ったときには相談すればよいという認識をもっていることがわかった。

これらの結果から、生徒たちは学習を通して消費に対する理解を深めることができたと考える。しかし、「契約」「解約」の認識は不十分であり、リボルビング払いやキャッシングのリスクについては、安易に捉えている生徒が多いという実態が明確になった。消費に関する学習は、豊富な情報を扱うため、8 時間完了の本單元だけでは内容を定着させるのは難しい。限られた授業時間ではあるが、2 年生、3 年生でも可能な限り消費者教育の時間を取り、生徒たちが中学校を卒業する時点で「社会への扉」で 100% 近い正解が得られるようにしたい。

(3) 実践のまとめ

企業が提供する情報について深く疑うことの少ない生徒たちであったが、今回の実践を通して、批判的思考力を高めることができた。それは、「学習塾」という身近なサービスの広告を共通の土台として、自分以外の他者の考えを聞き、多様な視点で意見や考えを吟味・検討したことが要因であると考えられる。

しかし、消費生活は変化が速いため、生徒たちが成年を迎えた後も、新しい情報を正しく見極める力が絶えず必要とされる。その時々状況に応じた、より多面的な批判的思考力が求められるのである。そのため、最新の状況をふまえた教材を開発するとともに、消費者団体や都道府県の消費生活センターなどが行う出前授業や、地方自治体で作成する資料を利用することが大切である。

さらに、グローバルな視点を持ち、エシカル消費、フェアトレードなど、環境や国際社会に対する意識を高めるための実践も必要となってくる。今後も、18 歳で成年となる生徒たちを「社会の一員として、よりよい市場とよりよい社会の発展のために積極的に関与する消費者」に育成することをめざして実践を積み重ねていきたいと考える。

Ⅲ 第74次教育研究愛知県大会の動向と今後の課題

1 技術教育

(1) 本年度の動向

「A 材料と加工の技術」「B 生物育成の技術」「C エネルギー変換の技術」「D 情報の技術」の四つの柱立てと、同市町での共同研究実践の報告や討論が行われた。技術科の目標とめざす資質・能力の実現にむけて、計十本のレポートが報告された。

総括討論では、「①学校、地域の特色を生かした授業展開や課題等」「②社会の発展に伴う技術教育としての今後の展開」などについて話し合われた。

(2) レポート及び討論の内容と指導・助言

① 「材料と加工の技術」にかかわる実践について

異なる作品を複数回製作することで学びの連続性が生まれ、技能の向上と子どもの主体性を引き出すことができた実践や、割り箸を用いた丈夫な構造物づくりコンテストを手だてとした技術の見方・考え方を育成する実践が報告された。また、さまざまな接合方法を体験させ、個別最適な学びから協働的な学びへとつなげるための実践が報告された。

討論では、融合教材を、例として内容AとD、内容BとDなどで考えていくことの必要性や、3DCADを視野に入れた実践研究を推進することの必要性や、レーダーチャートで評価させる場合には条件設定が大切であることが確認された。

② 「生物育成の技術」にかかわる実践について

地域の特色と農家の抱える課題から、地域と協働して伝統栽培を学ぶことで、地域への愛着・関心を高めることができた実践が報告された。

討論では、地域産業への理解を深める活動の有用性と、常に開発者の立場に立って考えを創造していくことの必要性が確認された。

③ 「エネルギー変換の技術」にかかわる実践について

ニーズに合わせたエレベータ製作を題材とすることで、生産者や消費者の立場、技術の4側面などを多面的・多角的に考えさせた実践が報告された。

討論では、主体的に取り組む態度の評価基準を明確にした、工夫したワークシートの紹介が出された。

④ 「情報の技術」にかかわる実践について

身の回りで活用できるセンサを使ったプログラム開発や、対象者を絞り商品化をめざしたゲーム開発の実践、AI技術の評価などを盛り込んだ授業が報告された。

討論では、個人に能力差があるプログラミング学習における、デバック場面での問い返しの重要性が再確認された。また、ターゲット層をイメージさせることでさらに子どもの興味・関心を引き出したいと意見交換された。

⑤ パフォーマンス課題の有効性について

各題材において貫いた学習課題を設定し、ルーブリックを明確にしながら学びを生活に生かそうとする子どもの育成をめざした実践が報告された。

討論では、子どもと共有した評価基準の練り上げと、更なる有効性の検証が確認された。

(3) 技術教育としての「ゆたかな学び」を考える（総括討論）

「①学校、地域の特色を生かした授業展開や課題」「②社会の発展に伴う技術教育としての今後の展開」について討論を行った。①については、地域のコミュニティーや人材バンク、キャリアナビゲーターを候補に入れてゲストティーチャーを選定したいという意見が出された。②については、ニーズを知るために子ども・保護者にアンケートを取

って教材設定に生かす取り組みや、s o c i e t y 5 . 0 社会での知識・技能の習得を見据え、技術科教員としての見聞を広めることが重要だという意見交換がされた。

助言者からは、常に発展する技術産業とシステムがもたらす未来を、教育という立場で子どもたちに考えさせていくことが大切であるという助言を得た。

2 家庭科教育

(1) 本年度の動向

子どもたちが相互のかかわりの中で考えを伝え合い、主体的に取り組む工夫がされた実践が報告された。

(2) リポート及び討論の内容と指導・助言

① 子どもたちに学びを自分事としてとらえさせるための実践

自立した消費者を育成するために、消費者としての批判的志向を高める実践では、導入でT V C Mを紹介したり、塾の広告から商品を選んだりして、身近な題材を取り上げ、消費生活を自分事として考えられる取り組みが報告された。衣生活では、「家族トーク」やコーディネートをする場面を設定し、課題を身近に感じられる取り組みが報告された。

② 意欲を保って授業に取り組み続ける工夫がなされた実践

食生活では、思考ツールの活用や食材のゆで時間の比較実験などを通して意欲的に家庭実践を行う取り組みが報告された。住生活では、汚れの可視化や汚れに合う洗剤を考え、掃除をしたいという思いを継続させる工夫がみられる実践が報告された。

③ 家庭との連携を取り入れた実践

食生活では、家族のために献立を考え、調理実習を行い、家庭での調理の意欲を高める報告がされた。また、みそ汁の実践ではワークシートを使って家庭とやりとりをしたり、家庭での調理の様子を学んでから調理実習をしたりすることで、スムーズに実習に取り組むことができた報告がされた。

助言者からは①授業づくりにおいて目的は先にあるもの、授業は子どもの思考でつなげていくべきである②授業のどこに時間をかけるか、どこまで内容をほり下げるかを見極めることが必要③子どもたち自身が未来をよくするため、コロナ禍を経て見えてきた本当に大切にしたいことを実践できるようにするとよい④「今日の授業で一生覚えておく」とよいことがらを意識して授業をすすめるとよいとの助言をいただいた。また、授業で活用しやすい教材教具や、今日的な課題を扱った授業実践を紹介していただいた。

(3) 家庭科教育としての「ゆたかな学び」を考える（総括討論）

総括討論では、限られた時間数の中で授業に取り組むために、「地域のボランティアと協力する」「調理器具を使いやすいサイズにする」などの意見が交わされた。また、持続可能な社会の実現にむけて「S D G s への理解を深める支援を行う」「学校や地域の特性と合わせて、生活にいかす」などの意見が交わされた。他にも、I C Tを活用した授業実践として「授業の様子を動画で撮影し、危険な場面を次時で共有する」などの意見が交わされた。

助言者からは、①自分で問題を解決する力をつけるために、課題との出会わせ方、向き合わせ方、解決方法を関連させたストーリー性が必要になるとよい②「自立した学習者」になるために、時間数が少ない家庭科でこそI C Tを活用し自学自習ができるような工夫をするとよい③思考ツールは子どもの思考に寄り添い、目的に応じて使い分けるとよい④家庭科教育の中で変わらないものがある。同時に今日的な内容にも触れる必要がある。その両方を意識して授業をすすめるとよいとの助言を得た。また、授業で活用

しやすい教材・教具や、今日的な課題を扱った授業実践が紹介された。

IV 終わりに

本年度の教育研究大会は、これまで以上に子どもたちが主体となり、一人ひとりのよさや可能性を大切にした実践が報告され、先生方の日々の努力の積み重ねを感じることができた。

第74次教育研究全国集会では、愛知の代表として、技術教育では名古屋市立当知中学校の榎本貴斗先生に「他者のニーズに合わせたものづくりができる生徒の育成」を提案していただいた。エレベータの模型製作を通じて生徒が技術の見方・考え方を働かせ、他者のニーズに合わせたものづくりができる生徒の育成をめざした実践である。視点を「スピード」「パワー」「経済性」「安全性」の4つに絞ったり、一次実践と二次実践での条件を変えたりしたことで、トレードオフの重要性に気付かせ、消費者のニーズを考える生産者の立場でものづくりをすることができる実践力の育成をめざしたものである。

家庭科教育では、西尾市立東部中学校の小原絵里先生に、「批判的思考力を育む授業開発」を提案していただいた。主体的かつ体験的な追究活動の中に、対話や問い直しの場を意図的に仕組んでいくことで、子どもが生活を多様な見方で捉え、価値観を広げられるようにしていくことをめざした実践である。「学習塾」という身近なサービスの広告を共通の土台として、自分以外の他者の考えを聞き、多様な視点で意見や考えを吟味・検討することで、批判的思考力を高めることをめざしたものである。

今後もよりいっそう充実した生活や技術に関する実践的・体験的な活動を取り入れ、生徒一人ひとりの思いや願いに寄り添いながら、子どもたちの現在、そして未来に生きてはたらく力を育む取り組みに期待したい。そして、子どもたちが願いをもって活動し、試行錯誤を繰り返す中で、その成果を実感できる実践が行われることを願う。

また、技術教育、家庭科教育の教育課程研究委員会においても、これまでの研究をもとに教科の専門性を生かし、基礎・基本をおさえながら学ぶ喜び・わかる楽しさを味わうことができるゆたかな学びの実現をめざしていきたい。これからも子どもたちが生活や社会における事象に主体的にかかわり、未来を切り拓く力を身につけることができるように研究をすすめていきたい。

なお、本誌を作成するにあたり、多くの先生方にご協力いただいたことに感謝し、今後、本誌が実践や研究の資料として活用されることを期待する。